

[総合的な学習の時間]

ツールを活用した探究のプロセス「整理・分析」場面における指導と評価のあり方

池田 利充*

1 研究の背景と主題設定の理由

学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間（以下、総合的な学習）の評価について、評価の観点だけでなく、評価規準を設定することが初めて記述された。

総合的な学習に関わる評価の動向については、まず、平成22年3月の中央教育審議会で、目標に準拠した評価を着実に実施することが報告された¹⁾。続いて、同年5月の文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（報告）」では、観点別学習状況の評価の観点とその趣旨等が示された²⁾。また、国立教育政策研究所教育課程研究センターは、これら報告や通知を受け、『総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料』³⁾を示した。この資料は、総合的な学習としての初の評価資料である。

これら経過からは、他の教科と同様に総合的な学習において具体的な児童の姿をイメージし、どのような力が付いたのかを明確にすることの重要性が再認識されたと考えられる。

総合的な学習では、探究的な学習であることを必須の要件としている。文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校）』は、この探究的な学習を四つの学習過程（図1）で示し、具体的な手立てとともに、この探究のプロセスを意識した授業改善の実践例を挙げている⁴⁾。田村（2012）は、探究のプロセスにおける「課題設定」と思考ツールを活用した「整理・分析」の場面に特に意識した授業づくりが探究の質を高め、自ら学ぶ子どもを育てることにつながると、授業改善のポイントを述べている⁵⁾。この田村の考えをもとに、先の教育実践研究（第23集）では、思考ツールの有効性とツールを活用した可視化・操作化による「整理・分析」場面の重要性について述べた⁶⁾。また授業づくりについて、井浦（2011）は総合的な学習において自ら学ぶ児童を育てる授業づくりのポイントとして2点を挙げる。1つ目は、「授業者が授業のイメージをもち、その授業を目指して、授業展開を考えながら学習指導案を作成すること」、2つ目は、「児童が学習活動に没頭する姿を具体的に思い浮かべることができる授業イメージを明確にすること」である。

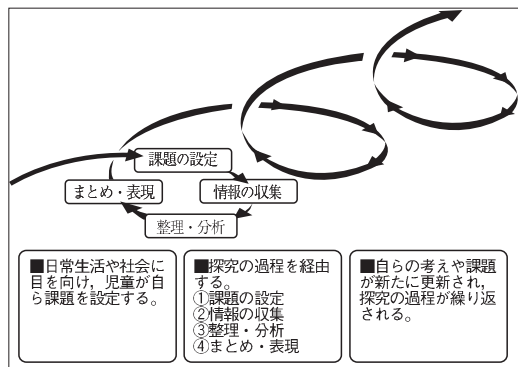


図1 探究的な学習における児童の学習の姿
文部科学省『学習指導要領解説(H20年度)』

こうしたことから、今、総合的な学習における授業に求められることは、以下の2点である⁷⁾。

- ① 探究のプロセスを充実させ、児童が学習活動に没頭する姿を確かに捉える（見取る）こと
- ② 児童が没頭する姿がどのように変容することを期待しているのかを示す（見通す）こと

したがって、「見取る」と「見通す」がなければ、「具現する」を考え、授業をイメージすることは難しい（図2）。個々の児童の実態を把握し、目指すべき児童の姿を明確にすることが重要である。児童の変容を見通すことは、「児童にどのような力が身に付いたのか」を明確にする評価にもつながる。『総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料』には、これら評価規準の設定手順の検証に関する先行実践が3つ、例示されている。初等教育資料（2011）では、胎内市立中条小学校の池田教諭の実践が挙げられてい

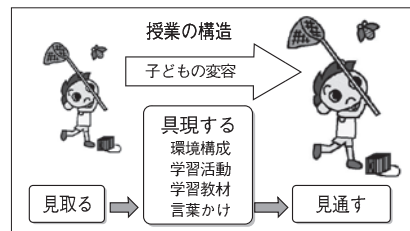


図2 授業の構造
『新潟県小学校新教育課程研究集会資料』2013

* 糸魚川市立糸魚川小学校

る⁸⁾。しかし、このような評価規準の検証に関する先行実践事例は少ない。

これら上記に挙げた評価資料や先行実践を基に、本研究ではツールを活用し、探究のプロセスの充実を図る中で、自ら学ぶ子どもを育てるための指導と評価のあり方を探っていきたいと考えた。

2 研究の目的と方法

本研究は、当校の第4学年において自ら学ぶ子どもの育成の具現化に向け、探究のプロセス「整理・分析」場面における指導と評価のあり方を探ることを目的とする。そのため、以下の2点を手立てとする。

- (1) 思考ツールを活用した思考の可視化・操作化による「整理・分析」のプロセスの充実を図る。
- (2) 情報の共有と新しい発見に出会うため、情報の整理・分析後、他者に伝えたり、自分の考えとしてまとめたりする活動を設定する。

3 単元の概要

『総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料』を参考に、以下のような単元の構想及び評価規準等を設定した。

- (1) 単元名「探ろう！道と人，私たちとの関わりー伝えよう！塩の道ってどんな道？ー」 第4学年 全15時間
年間指導計画における本単元の位置付け

「道を歩くー糸魚川と私たちのみちを探ろうー」70時間			
「歩こう！ ジオパーク塩の道」 (25時間)	「探ろう！古道塩の道 ー道の役割と糸魚川ー」 (20時間)	「探ろう！道と人， 私たちとの関わり ー伝えよう！塩の道ってどんな道？ー」 (15時間)	「見つけよう！ 糸魚川とこれからの私」 (10時間)

(2) 単元の目標

- ① 地域の歴史や文化，道と人との関わりを通して，現在の「塩の道」の働きに気付き，その魅力を考える。
- ② 人との関わりを通して，地域住民の古道や地域に寄せる思いや願いに気付き，私たちの役割を考える。
- ③ 一年間の活動を通して，ふるさと糸魚川への新たな気付きや思いをもち，自分の言葉で地域の魅力やよさを伝えることができる。

(3) 単元の構想

① 単元で育てようとする資質や能力及び態度

【学習方法に関すること】

ア 進んで人との関わりをもち，対話を通じて地域のよさや課題を見付ける。

イ 地域の人の思いや願い，「塩の道」の魅力やふるさと糸魚川のよさを自分の言葉で整理し，分かりやすくまとめる。

【自分自身に関すること】

ウ 課題を解決するためのよりよい方法を多面的に考え，追究している。

【他者や社会とのかかわりに関すること】

エ 塩の道に対する様々な人の思いを受け，新たな気付きや思いを深めながら，道と人（自分）との関わりについて考えをもつ。

オ 塩の道を通じて地域をよりよくしようとしている人々の素晴らしさに気付く。

② 単元で学ぶ内容

ア 「塩の道」の現在の役割と，地域の昔と今

イ 「道と人との関わり」や「道と地域のつながり」

ウ 地域をよりよくしようとする地域住民の思い

(4) 単元の評価基準

観点	ア 課題設定する力	イ 課題追究する力	ウ 表現する力	振り返る力
単元の評価基準	①蓄積した資料や整理した新聞を基に、調べてみたいテーマや疑問を設定している。【資質や能力及び態度－ア】	①地域の方への取材活動から、塩の道や糸魚川の魅力、地域の方々の思いや願いを見付けようとしている。【資質や能力及び態度－ア・ウ・オ】 ②塩の道や糸魚川の魅力を分かりやすく伝えようと、ポスターセッションの構想を練っている。【資質や能力及び態度イ・ウ】	①歩く活動や塩の道新聞、取材シート等を基に塩の道の魅力を自分の言葉(キーワード)で表現している。【資質や能力及び態度－イ】 【内容－ア・イ・ウ】 ②ポスターセッションに向け、塩の道や糸魚川の魅力がよりよく伝わるよう蓄積した資料を生かして発表原稿を工夫したり、写真や地図などを効果的に活用して発表したりしている。【資質や能力及び態度－イ・ウ】	①歴史や文化、景観など様々な視点で塩の道や糸魚川の魅力を振り返り、発表準備を通して、導き出している。【資質や能力及び態度－エ・オ】 【内容－ア・イ・ウ】

(5) 指導と評価の計画

時間	◎ねらい ○学習内容 ・学習活動	○評価規準 ・評価方法
第一次	◎人との関わりを通して、地域の方の古道や地域に寄せる思いや願いに気付き、私たちの役割を考える。 ◎地域の歴史や文化、人との関わりに触れ、現在の「塩の道」の働きや魅力を考える。	
7	○これまでの活動を基に、さらに調べたいことを整理し、学習計画を立てる。 ・調べてみたい疑問やテーマを共有しながら調査・取材計画を立てる。 ○地域の方への取材を通して、塩の道の魅力を考え、地域の方の思いに触れる。 ・「塩の道の会」の方に取材を行う。 ・塩の道の魅力や糸魚川よさ、地域の方々の思いや願いを話し合う。 ○一年間の活動を振り返り、自分が発見した塩の道の魅力やよさを整理する。 ・一年間の活動や学びをウェブページ(イメージマップ)で整理し振り返る。 ・私たちが発見した塩の道の姿(魅力)を整理し、共有する。 〈取組①〉	○蓄積した資料や整理した新聞を基に調べてみたいテーマや疑問を設定している。【ア－①】 ・観察による評価(行動観察・発言) ・制作物による評価(学習及び取材計画シート) ○地域の方への取材活動から、塩の道や糸魚川の魅力、地域の方々の思いや願いを見付けようとしている。【イ－①】 ・観察による評価(行動観察・発言) ・制作物による評価(取材シート) ○歩く活動や塩の道新聞、取材シート等を基に、塩の道の魅力を自分の言葉(キーワード:「塩の道は○○な道」)で表現している。 【ウ－①】 ・制作物による評価(イメージマップ・クラゲ図・ランキング表) ・観察による評価(行動観察・発言)
第二次	◎一年間の活動を通して、ふるさと糸魚川に新たな気付きや思いをもち、自分の言葉で地域の魅力やよさを伝えることができる。 ○「塩の道はどんな道?」のテーマの下、一年間の学びを他学年や保護者、地域の方に発信するための発信内容と手段を考える。〈取組②〉 ・クラスでまとめたウェブページを基に、どのようなテーマで発信するのか話し合い、小テーマを決定する。 ・塩の道の魅力、糸魚川よさがよりよく伝わるよう工夫して発表原稿や資料の作成、発表準備を行う。 ○塩の道の魅力や糸魚川よさを他学年や保護者、地域の方々に発信する。 ・自分たちの伝えたいことがよりよく伝わるよう発表資料を活用し、発表する。	○塩の道や糸魚川の魅力を分かりやすく伝えようと、ポスターセッションでの構想を練っている。【イ－②】 ・制作物による評価(学習シート・構想メモ) ・観察による評価(行動観察・発言) ○歴史や文化、景観など様々な視点で塩の道や糸魚川の魅力を振り返りや発表準備を通して、導き出している。【エ－①】 ・観察による評価(行動観察・発言) ・制作物による評価(学習シート・構想メモ・シナリオ) ○ポスターセッションに向け、塩の道や糸魚川の魅力がよりよく伝わるよう蓄積した資料を生かして発表原稿を工夫したり、写真や地図などを効果的に活用して発表したりしている。【ウ－②】 ・観察による評価(行動観察・発言・発表練習) ・制作物による評価(シナリオ・発表資料)

4 指導の実際

(1) 思考ツールを活用した思考の可視化・操作化による「整理・分析」のプロセスの充実を図る。－「クラゲチャート図」による塩の道の姿とランキング化－〈取組①〉

児童は、塩の道を5回に分けてフィールドワークを行い、振り返りシートやフィールドマップに付箋を貼り付けながら気付きや疑問を蓄積してきた。少しずつ塩の道や糸魚川の魅力が言葉として出てはいるが、児童の中にはそれが魅力やよさだという意識はない。そこで、「塩の道はどんな道?」を合い言葉に、フィールドワークで感じた根拠から各自で塩の道のネーミングを決め、蓄積していく活動を行った。「塩の道はどんな道?」を検討していくことで塩の道の隠れた魅力が明確になっていくと考えた。そこで次のような手立てを用いた。

クラゲチャート図(以下、クラゲ図)については、クラゲの足に根拠を示しながら「○○な道」を決定していく。足は何本あってもよい。この活動を通して自分の発見した塩の道の姿を関係付けたり、理由付けたりすることがねらいで

あった。さらに、クラゲの足をランキング化することで根拠をもち、自分の思いを明確にさせることも意図している。

児童は、蓄積したシートや作成した塩の道新聞、フィールドマップの付箋などを手掛かりにクラゲの足に次々と自分の発見した塩の道の姿を整理した。例えば、「自然の道」や「地蔵の道」「危険な道」といった視覚的に捉えた道の姿、「大変な道」「きつい道」「苦勞が分かる道」と実感を伴った道の姿などいずれも体験を通したものが多かった。また、調べ活動から得た情報や知識から「見所がいっぱいの道」、取材活動で地域住民の方の思いに触れた「誰でも残したいと思う道」「宝の道」「大切にされてきた道」などに整理された。クラゲの足をランキング化することで「いろんな地蔵があったり、長い時間をかけてできたウトウがあったりして、歩くだけで地名や昔のこともわかるので不思議な道だなと思った」など、根拠をもって堂々と自分の言葉で他者に伝える児童の姿が見られた。

この学習活動においては、「ウ 表現する力」の評価規準を「①歩く活動や塩の道新聞、取材シート等を基に、塩の道の魅力を自分の言葉（キーワード）で表現している。」と設定した。

A児は、塩の道ルートの大変さを「国道があるのに、なぜボッカはこんな道を通るのか」と、歩く体験を通して実感し、坂の多さや道の危険性を度々振り返りシートに記述してきた。また、塩の道新聞作りでは、テーマを「塩を運ぶボッカのつらさ」と設定し、調べ学習を進めてきた。「道の学習会」では地域の方から塩の道の成り立ちは「けもの道」だと情報を得た。

その結果、A児はクラゲ図に塩の道の魅力を整理する場面で、まず1番にその魅力を「人間と動物の共同の道」と記述した。そして、友達と塩の道の姿を共有する場面では、山道を歩いた時の動物の足跡や糞を発見した気付きとつなげ、「昔も今も人間ばかりではなく、動物もこの道を利用していることが分かった。人間ばかりではなく動物もこの道を必要としていることを伝えたい。」とみんなに伝えた。こうした姿から、評価規準に示す児童の姿が実現していると考えられることができる。



図3 B児のクラゲ図シート

一方、B児はフィールドワーク時から「なぜ、塩が運ばれたのか」という疑問をもっていた。その後、「塩の道の起点の秘密」「塩の作り方」について調べた。塩は糸魚川海岸で作られた塩と瀬戸内から送られてくる塩があったことに気付いた。また、塩の作り方には違いがあり、糸魚川では揚浜式塩田法という手間のかかる方法で作られていたことを知った。さらに、人間と塩の関係を調べ、塩の役割と私たちの生活との関わりを知り、人間にとって塩は生命の源であることにも気付いた。

また、B児はクラゲ図に整理する活動で、「命を運ぶ道」と記述した。「長野では塩を作ることができない。その塩を糸魚川から松本まで運んだ道だし、この道は長野の人の命をつないでいたから。」と理由付けた。B児は、みんなに「山と海をつなぐ命の道である」と伝えた。こうした姿から、評価規準に示す児童の姿が実現していると判断することができる。

(2) 情報の共有と新しい発見に出会うために、情報の整理・分析後、他者に伝えたり、自分の考えとしてまとめたりする活動を設定する。ーポスターセッションに向けた「ウェビング」による発表構想ー〈取組②〉

本単元の学習形態を図4のように設定した。

クラゲ図に思い思いの塩の道の姿を整理した児童は、発表テーマ「塩の道ってどんな道？ーいろいろな塩の道の姿ー」と設定し、塩の道の姿を魅力として他学年や保護者、地域の方へ発信する活動を設定した。発信するために以下のような手立てを用いた。

教師は「塩の道ってどんな道？ー様々な塩の道の姿ー」を、ウェビングの中心のトピックに置き、クラゲ図に整理した「塩の道は〇〇な道」を児童に伝えさせた。そして、具体的な活動や気付き、学んだことなどをキーワードにして関連付

主な学習活動の流れ	学習形態	思考ツール
①ポスターセッションに向けて伝えたい大テーマを設定する。	個人→全体	・フィールドマップ(付箋)
②「塩の道は〇〇な道」をクラゲ図に整理、ランキング化する。	個人	・クラゲ図 ・塩の道新聞
③「塩の道ってどんな道？」についてウェビングでまとめる。	個人→全体	・イメージマップ ・ウェビング
④ウェビングを活用して発信するテーマを絞る。		
⑤発表グループを決定し、何をどのように発表したらよいか、発表の構想を練る。	個人→発表グループ	・クラゲ図 ・塩の道新聞 ・イメージマップ ・ウェビング ・構想メモ
⑥発表のシナリオづくりとポスターセッション資料を作成する。	個人あるいは発表グループ	・構想メモ ・イメージマップ ・ウェビング
⑦ポスターセッションで私たちが見付けた塩の道の姿(発見や魅力)を発信する。	発表グループ	・ポスター資料

図4 情報の整理・分析前後の学習形態の流れ

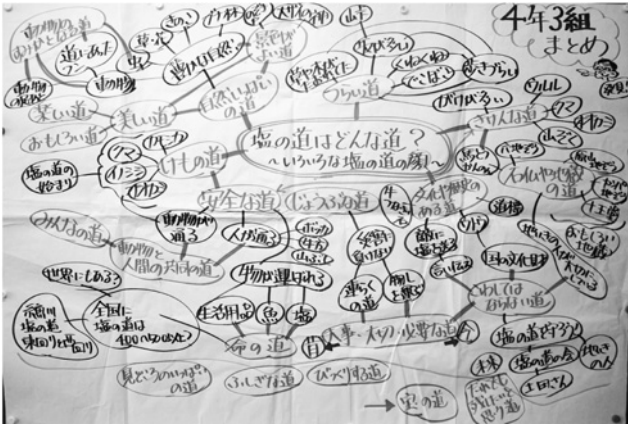


写真1 クラス全体でまとめた「塩の道ってどんな道?」のウェビング

その後、このウェビングを基に、ポスターセッションに向けて小グループで誰がどの部分を発信していくのか、発表内容と構想を練ることができた。

この学習においては、「イ 課題追究する力」の評価規準を「②塩の道や糸魚川の魅力を分かりやすく伝えようと、ポスターセッションの構想を練っている。」と設定した。G児は、ウェビングを基に「7.11水害の時、国道が壊れたのに塩の道は、がけ崩れもなく残った。だから安全な道だったと伝えたい。」と話す。また、「車が通れなくなり、情報も食料も長野まで届かない時に、この道が連絡路や運搬路として使われたことを、誰も知らないと思う」と話す。しかし、発表構想メモの作成場面で「安全な道だったことも伝えたいけれど、急な斜面や峠がいくつもあり、危険でけわしい道だったことも伝えたい。発表の流れを考えているんだけどうまくつながらない」と発表構想メモの作成に行き詰まった。

そこで、教師は「聞き手は塩の道のことをどれくらい知っているのかな?」と問い掛けをした。G児の活動シートと行動観察の結果、評価規準に挙げた目指す姿を達成できていないと判断しての声掛けである。G児は「塩が運ばれたことと、山道は大変なことかな。」と話した。

さらに、教師は「みんなだったら、知っていることと知らないことのどちらを後に話すと、へえ～!と驚くかな?」と問い掛けた。すると、「ぼくたちが歩いた山道は、がけがあって危険な道だったで終わるよりも、本当は水害に耐える安全で強い道だった!の方が、驚くかな?」とつぶやく。その結果、G児はその後のグループでの話合いで「自分たちしか知らない塩の道についての発見は、最初に言っちゃってもったいないから、後からドーンと伝えようよ。」と、自分なりの発表構想を基に、自グループの発表の流れを提案した。こうした姿から、評価規準に示す児童の姿が実現していると判断することができる。

けながら、教師と児童とで大洋紙にウェビングを使って学びを整理した(写真1)。

児童らは、これまでにウェビングを作成しており、例えば、C児が「塩の道は素晴らしい景色のある道。遠足で白池を見た時、青々していてもきれいだっ」と発言すると、D児は「大ザイの神から見る私たちの糸魚川や日本海の景色もよかった」と関連付けた。また、E児が「おもしろい地藏や石仏の道」と発言すると、F児は「原山地蔵に兄弟地藏がいることを調べて分かった」と、発見した塩の道の姿から、様々な事柄を関連付けてきた。ウェビングが広がっていくと同時に、児童はこれまでの活動や学びを振り返り、視覚化して整理することができた。

終わりに	中	はじめ	書名
塩の道の活動を通して、海と山と川とが命の道	塩の道ってどんな道? ①塩の道の何の姿(すがた)か ②歩いた道(すがた) ③安全な道(すがた) ④命の道(すがた) ⑤水害で壊れた道(すがた) ⑥急な斜面や峠(すがた) ⑦情報も食料も届かない道(すがた) ⑧車が通れなくなった道(すがた)	①何のために活動してきたのか ②どんな活動をしたのか	構想メモ(発表メモ) Bグループ
イメージ	イメージ	イメージ	

図5 G児グループのポスターセッションに向けた構想メモ

5 考察

(1) 思考ツールを活用した思考の可視化・操作化による「整理・分析」のプロセスの充実を図る。

「塩の道はどんな道?」のクラゲ図の作成は、塩の道に寄せた自分の思いや発見した魅力を「道の姿」として視覚化させ、キーワードで表現・整理させる効果があった。過去の活動を記録したシートをじっくりと眺めながらクラゲ図に整理する姿は、これまでの活動をじっくりと振り返り、自分の言葉で表現している姿であった。

また、自分の表現した「道の姿」をランキング化することで他者に伝えるための根拠も明確になった。その後、各自が「道の姿」を図で示し、関連付けながら他者に伝えることができた。A児やB児のように児童がクラゲ図を示し、他者に自信をもって伝える姿は、正に「自分の言葉で表現している」と捉えることができる。自ら学び自ら考える子どもの姿を見取ることができた。

このような一連の評価活動が行えた理由として、思考ツールの可視化を目的としたクラゲ図や新聞などの制作物を評価情報の中心として位置付け、具体的な評価の場面と評価規準を定めた「指導と評価の計画」の作成が重要であったと考える。

(2) 情報の共有と新しい気付きに出会うために、情報の整理・分析後、他者に伝えたり、自分の考えとしてまとめる活動を設定する。

ウェビングを作成後、意図的にグループや全体で情報共有・意見交換の場を設定したことは、塩の道の魅力や糸魚川よさを伝えようとする目的をさらに明確にし、よりよい発表構想を考える協同的な学びの場になった。元々、ウェビングの中心に添えるポスターセッションの大テーマ「塩の道ってどんな道?—いろいろな塩の道の姿—」は児童から出てきた言葉である。この言葉は、これまでの探究のプロセスの中で、最終的に伝えたい思いが絞られたキーワードである。この大テーマが設定されたことで、「ポスターセッション」という相手意識をもって伝える場が児童に強く意識され、発表構想を練る場では、常に立ち返る合言葉になった。

また、発表グループは教師が意図的に編成し、児童らに提案をした。これまで児童の追究してきたテーマとまとめ方（新聞の内容等）、振り返りシートの記述、クラゲ図などを基に、教師が見取って総合的に判断した。評価規準にある「イ 課題追究する力②」「ウ 表現する力①及び②」に挙げた目指すべき児童の姿を具現化できるものと見通したグループ編成である。これにより、その後の発表構想メモ作りやシナリオ作りの活動において、児童はこれまでの自分の持っている資料や情報と合わせ、ウェビングで整理した数々の学びのキーワードを活用しながら、自分たちの言葉で表現することができた。G児の変容はその後もグループのメンバーにも影響を与え、ポスターセッションでは、オリジナリティある塩の道の魅力をポスターに表し、聞き手に伝えることができた。

指導と評価のあり方として、構成メモなどの制作物による評価に加え、行動観察などを加味した評価の重要性を実感した。具体的には「構成メモに対話を加えた評価」である。

6 まとめ

評価規準は「育てようとする資質や能力及び態度」と「内容」の全項目が網羅されていることが重要である。そうであれば、まずこの2つの項目がしっかりとしたものではないと判断するべきではない。評価規準の拠り所となるからである。また、評価規準の各観点に即して、実現が期待される児童の姿が、単元のどの場面でのどのような学習活動において、どのような姿として実現されるのかを明確にすることが重要であると本実践を通して改めて実感した。児童の目指す姿を明確に設定し、具体的な学習状況がイメージできるようにしておくことで、具現化に向けた授業を構想し、児童のつまずきを捉え、適切な手立てを講じることができた。また、その後の児童の変容を見取り、学習状況の質的な高まりや広がりを的確に見取っていくために有効であった。

このように、探究の質が高まる「整理・分析」場面において、児童の実態を見取り、児童の変容を見通した授業づくりや評価ができたことは、授業改善を目指した「指導と評価の一体化」の成果であると考えられる。今後も目指す子どもの姿を明確にし、日々の実践の積み重ねと子どもの姿を捉えた学習評価を行っていきたい。

評価に関する今後の課題として、多様な評価方法の導入とその検証である。自己評価や相互評価といった評価方法は自己の高まりや変容を実感し、意欲の向上につながると思われる。また、他者評価のように教師や地域住民等から評価をしてもらうことで、自己評価と照らし合わせた客観的な評価ができる。児童にとって成就感や自己肯定感を高めるには有効であろう。このような多様な評価方法の導入と検証を今後、取り組んでいきたい。

引用文献・参考文献

- 1) 中央教育審議会 「児童生徒の学習評価の在り方について (報告)」2010
- 2) 文部科学省 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」2010
- 3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター 「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料 (小学校)」2010
- 4) 文部科学省 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (小学校)』2010, p.17
- 5) 新潟県教育庁義務教育課 「新潟県小学校新教育課程研究集会資料」2013, pp.158-159及び総合的な学習部会補足資料
- 6) 田村学 「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善」文部科学省教育課程課・幼児教育課編 『初等教育資料11月号』東洋館出版, 2011, pp.20-21
- 7) 池田利充 「言語活動を適切に位置付けた思考力や表現力を育てる「探究的な学習」のあり方—思考ツールを活用した思考の可視化、操作化による「整理・分析」—」『教育実践研究 (第23集)』2013, pp.277-282
- 8) 池田裕之 「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善の実践」文部科学省教育課程課・幼児教育課編 『初等教育資料11月号』東洋館出版, 2011, pp.22-23

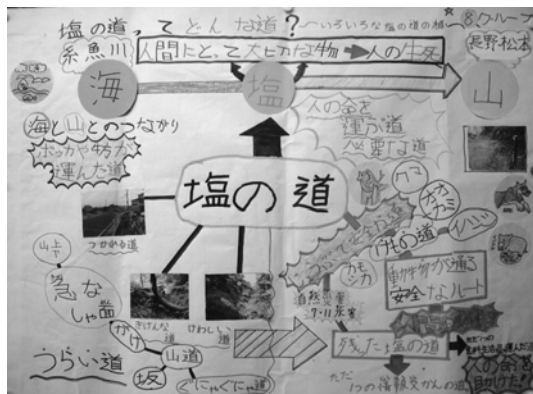


図6 G児グループのポスターセッション資料 (一部)